

日中韓十における各国民の意識調査

— 相互理解と友好関係構築の可能性を探る —

氏名：許静香

学籍番号：24F1103005B

提出日：11月3日

1. 活動テーマと目的

本活動の目的は、東アジア地域における相互理解と信頼構築の可能性を、市民の意識や発言を通して探ることである。日本、中国、韓国、台湾、といった近隣諸国は、長い歴史の中で文化・経済面で密接な関係を築いてきた。しかし同時に、歴史認識や報道、政治的立場の違いから生じる心理的な距離も存在している。

こうした問題は国家間の外交だけでなく、一般市民の感情や日常の交流にも影響しており、「政治関係が冷え込むと、国民感情も悪化する」という悪循環が見られる。

そこで本研究では、政治や報道の枠を超えた「人々の声」を通して、国民レベルでの相互理解の現状を明らかにすることを目的とした。

具体的には、日本国内での街頭インタビュー、アンケート調査、大学生を対象としたフォーカスグループなどを行い、隣国に対する印象や関心、交流への考え方を調査した。さらに、優先度投票やバリューカード法といったワークショップ型手法を取り入れ、参加者の意識構造を可視化することを試みた。

これらを通して、どのような価値観が三国間の関係改善に寄与するのか、また、教育・文化・交流の分野でどのようなアプローチが有効かを検討することを目指した。

2. 活動の経緯と背景

本活動の原点には、私自身の「二つの文化のあいだで育った経験」がある。私は日本に生まれ、小学校二年生まで中国の福建省で生活していた。中国では、日本に対して否定的な意見を耳にすることが多く、幼いながらも国によって価値観や歴史の教え方が異なることを感じていた。その後、日本に転校した際には、日本語も分からず、文化的な違いに戸惑う毎日だった。クラスメイトや先生に助けられながら少しずつ馴染んでいったが、言葉が分からないだけで人と人のあいだに誤解が生まれることを実感した。

このような体験を通して、私は「異なる文化への理解不足が偏見を生む」という問題意識を持つようになった。大学入学後、国際経営学部で学ぶ中で、特に深町先生の歴史学の授業が大きな転機となった。授業では、歴史を単なる年号の暗記ではなく、複数の地域や立場から捉える姿勢を重視しており、日本、中国、台湾、などの異なる視点から歴史を比較する機会を得た。その経験から、「過去をどう記憶するか」が現在の社会認識や国民感情を形づくることを理解した。

また、国際関係学の授業で木村優里先生が語られた「地域調査は、虫眼鏡で見ることと望遠鏡で見ること、どちらも大切だ」という言葉が、今回の活動の方向性を決定づけた。この言葉に触発され、私は「身近な人々の声を丁寧に聞くこと（虫眼鏡的視点）」と「国家や社会全体の関係性を俯瞰すること（望遠鏡的視点）」の両方を意識した調査を行いたいと考えようになった。つまり、一人ひとりの意識を出発点としつつ、その背後にある社会構造や情報環境を読み解くアプローチである。

さらに、中国の SNS で日本に対する否定的なコメントを目にするたびに、「情報の受け取り方が国民感情を大きく左右している」ことを痛感した。こうした経験から、私は「今の若者たちはどのように隣国を見ているのか」「何が相互理解を妨げているのか」を明らかにしたいと考えようになった。

その思いを具体的な行動に移すために立案したのが、今回の意識調査・討論活動である。大学で学んだ理論をもとに、現実社会の中で実際に人々の声を聞き、未来に向けた小さな一歩を形にすることを目指している。

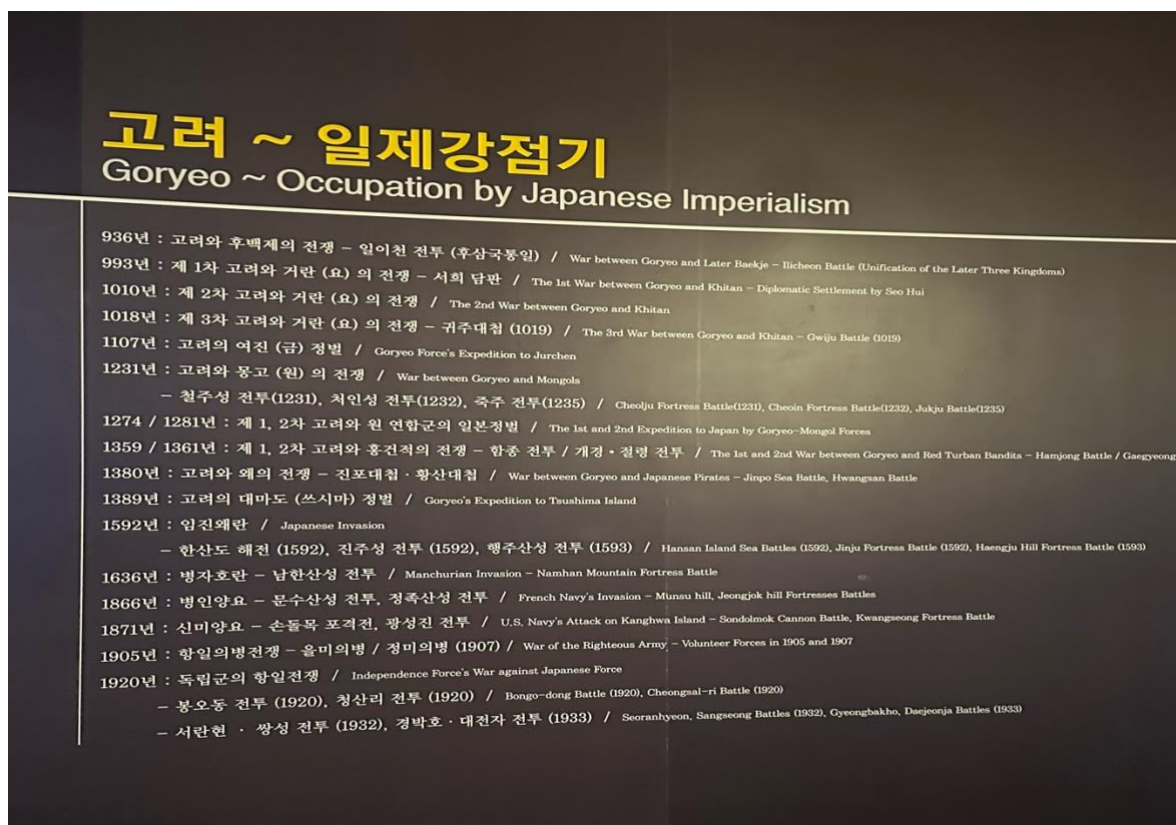
3. 活動内容

本研究活動は、2024年8月から10月にかけて、韓国・台湾・中国の三地域を中心に実施した。各地域での滞在と現地調査は、文化的・政治的・歴史的観点から相互理解を深めることを目的としており、街頭インタビュー、優先度投票、博物館訪問、現地学生との意見交換を主な手法とした。以下に各期間の概要を示す。

【8月4日～8月22日 韓国・檀国大学短期留学プログラム】

滞在中は大学での語学研修に加え、韓国社会における歴史認識の形成を理解するため、複数の文化施設や歴史的遺跡を訪問した。

8月14日には韓国戦争記念館を訪問。広大な展示空間の中で、日本による侵略史、領土意識（特に「高句麗」や「渤海」をめぐる歴史的解釈の違い）など、韓国側から見た「国家の記憶」との向き合い方を学んだ。また、「青三里戦争」について、韓国では独立の象徴とされているが、日本側の史料では継続的な支配として扱われるなど、歴史認識のズレが存在することを実感した。



8月17日には景福宮（キョンボックン）を訪問。日本の義務教育を通して学んできた歴史との違いを強く感じた。韓国人の友人から「日本軍が景福宮を破壊した過去がある」と教えられ、観光地として多くの日本人が訪れる現在とのギャップに驚いた。また、韓国では伊藤博文が“侵略者”として語られ、安重根が“独立の英雄”として教育されていることを知り、同じ出来事でも国によって英雄と罪人の立場が入れ替わる現実を理解した。



【8月22日～8月27日 台湾滞在】

台湾では、台北および台南を中心に歴史・文化調査を行った。8月25日に中正紀念堂を訪問し、蒋介石の生涯と思想に関する展示を見学。

蒋介石記念館を訪れ、戦後に彼が中華民国政府を台湾に移し、その後も「統一中国」の理念を掲げ続けた歴史を学んだ。展示を通して、蒋介石が単に台湾の指導者としてではなく、「大陸を取り戻す」理想を抱いていたことを知り、台湾の国家認識の複雑さを実感した。

一方で、1971年の国連決議によって中華人民共和国が「中国の唯一の合法政府」と承認された事実は、台湾が国際的に孤立するきっかけにもなった。台湾では「自分たちは中華民国として日本から返還された」と教わっており、「中華人民共和国に属したことはない」という意識が根強いという。

現地の学生との対話の中で、政治的な緊張や教育による世論操作は続いているが、それでも多くの若者は「戦わずに現状を維持したい」と願っており、平和的共存を模索する姿勢に希望を見出した。



二七五八(二十六). 恢復中華人民共和國在聯合國的合法權利

大會，
回顧聯合國憲章的原則，
考慮到，恢復中華人民共和國的合法權利對於維護聯合國憲章和聯合國組織根據憲章所必須從事的事業都是必不可少的，
承認中華人民共和國政府的代表是中國在聯合國組織的唯一合法代表，中華人民共和國是安全理事會五個常任理事國之一，
決定：恢復中華人民共和國的一切權利，承認她的政府的代表為中國在聯合國組織的唯一合法代表並立即把蔣介石的代表從它在聯合國組織及其所屬一切機構中所非法佔據的席位上驅逐出去。

一九七一年十月二十五日，
第一九七六次全體會議。

各位同胞，
今天就是臺灣光復一週年紀念，中正特來參加這次慶祝大會，與我相隔五十年的臺有同胞同聚一堂，共同慶祝光復，使我五十年的宿志得如願以償，實在是生平感到最愉快最光榮的一天。
我們臺灣省自甲午年四月十七日由昏庸的清廷割讓給日本帝國主義以後，淪於敵手，竟達五十一載之久，在這慘痛的五十一載之中，臺灣全省同胞，固然身受日人的壓迫，淪落政治上經濟上各種虐待和不平等的痛苦，我們全國同胞更是時時懷想這座橫遭劫奪的寶島，以及島上強被割離的同胞們。我們國父倡導國民革命，即以光復台灣為革命的主要目標之一。國父在台灣失陷的一年，就在檀香山組織興中會，當時發布宣言，就提出「恢復台灣，鞏固中華的口號」。此後我們全國革命黨員，以及中正本人，無



【8月28日～ 中国・厦門大学交換留学】

8月28日より、厦門大学にて一学期間の交換留学を開始。中国における教育・報道・世論を現地から直接観察した。授業内外で学生たちと議論を重ねる中で、「不忘国耻（国の恥を忘れるな）」という言葉が日常的に使われ、国家の歴史的記憶が若者の意識形成に深く影響していることを実感した。また、台湾を「中国の一部」として語る教育構造や、政府主導の統一キャンペーンの実態を調査した。

滞在中、SNS上で「台湾の古い住宅は地震に弱い、それは“いつか大陸に戻る”と信じた人々が仮住まいとして建てたからだ」という投稿を目にした。真偽は不明だが、その話から「世代ごとに未来への見方が全く異なる」という事実を感じ、過去と現在の価値観の断層が台湾社会に深く刻まれていることを痛感した。



(1) 日本での活動 ― フォーカスグループインタビュー

7月22日、中央大学多摩キャンパスにて、日本人大学生4名を対象にフォーカスグループインタビューを実施した。テーマは「日中韓の印象と、より良い関係を築くための方策」。

議論では、「韓国文化には親しみがある一方で、政治報道によって距離を感じる」「教育の段階から隣国を知る機会を増やすべき」といった意見が挙げられた。特に、ニュースやSNSの影響が印象形成に大きく作用している点が顕著だった。

その後、日中韓の不仲の要因について順位づけを行った結果、最も多く挙げられたのは「メディアなどの報道」であり、次いで「経済摩擦」「安全保障への不信感」「領土問題」「歴史的問題」「相互理解の不足」が続いた。これにより、政治的要素よりも、報道の影響や相互理解の欠如が関係悪化の背景にあることが示唆された。



(2) 韓国での調査（檀国大学短期留学期間：8月4日～8月22日）

韓国では、檀国大学での短期留学期間を利用し、現地の大学生との個別インタビューを行った。

多くの韓国人学生は「日本文化が好き」「アニメや旅行を通じて日本に親近感を持つ」と答えた一方で、「歴史的な問題や領土問題はいまだに残っている」とも述べた。また、「中国が韓国文化を奪っているような報道が多い」との意見も複数あり、対中感情には警戒心が見られた。

全体として、政治的関係には距離があるものの、若者同士の交流は活発であり、「政治よりも個人間の対話や文化交流を重視すべき」という意見が多く聞かれた。

(3) 台湾での調査（8月22日～8月26日）

台湾では、4日間の現地滞在の中で、街頭インタビューや大学生との意見交換を実施し、加えて国立台湾歴史博物館を訪問した。

台湾の参加者の多くは、「日本に対しては好意的」「韓国とは経済的に競争関係」「中国に対しては複雑な感情」という三層的な印象を抱いていた。

特に「中国は文化的に魅力的であるが、政治的体制の違いから距離を感じる」という発言が目立ち、文化的敬意と政治的不信感が同居していた。また、「日本は文化的に成熟しており、観光地としても人気が高いが、戦争責任や歴史問題に対してより誠実な態度が求められる」との指摘もあった。

博物館調査では、台湾社会における「日本統治期の記憶」と「中国文化の継承」が共存しており、過去の経験が現在の対外意識に大きく影響していることを確認できた。

(4) 中国での調査（厦門大学交換留学期間：8月28日～）

厦門大学での交換留学中には、中国人学生へのインタビューと討論を実施した。

多くの中国人学生は「日本のアニメや文化は好きだが、日本社会はやや閉鎖的」「韓国文化は人気だが、最近のメディア報道で印象が変化した」と述べていた。また、「中国は経済的に発展しているが、報道やSNSの制限により他国への理解が偏る」という自己批判的な意見も見られた。

一方で、「日本が戦争責任をより明確にすべき」「三国は経済・貿易面で協力し、教育・人文交流を深めるべき」との意見も多く、政治的課題の存在を認識しながらも協調の必要性を感じている様子が見えた。

このほか、「中韓の報道が互いに相手国を強く批判しているが、個人としては直接会うと印象が違う」という声も多く、情報の影響力と現実の差を意識する学生が増えていることが印象的だった。

(5) 総括

日本、韓国、台湾、中国の4地域での調査を通して明らかになったのは、「政治的対立構造」と「人々の感情」の間に存在する大きなギャップである。

どの地域でも、若者は他国の文化に強い関心を持ちながらも、報道・教育・SNSによって形成される固定観念に影響を受けていた。特に、台湾や韓国では「歴史教育を通じた相互理解の促進」、中国では「自由な情報交流の重要性」、日本では「他国を学ぶ教育機会の不足」が課題として浮かび上がった。

これらの結果から、国家間の政治的摩擦を越えて、市民・学生レベルでの交流や対話を増やすことが、東アジア地域の持続的な平和と共存に不可欠であることが確認された。

4. 分析と考察

本研究を通じて、東アジアにおける国際認識の差異は「国家間の歴史構造」と「個人レベルの感情・経験」の両方から生じていることが明らかになった。特に、日中韓の三国関係と、中国・台湾の関係には本質的に異なる問題構造が存在する。

A. 日中韓の三国関係

日本、韓国、中国の三国に共通して見られたのは、「文化的な親近感」と「政治的・歴史的な隔たりの共存」である。

日本では、学生が他国に対する知識を主にニュースや SNS から得ており、教育現場における近隣国理解の不足が印象形成に影響していることが確認された。

韓国では、「日本文化が好き」という文化的親近感と、「植民地支配や義兵運動などの歴史的記憶」に基づく対日感情が複雑に交錯している。また、青山里戦争（1920 年）など、独立運動の勝利を民族的誇りとして強調する一方、日本側の教育では扱いが少ないことへの不満も語られた。

中国に対しては、「韓服やキムチを中国起源と主張する」「北朝鮮への支援で地域が不安定になる」といった不信感が見られ、文化的・安全保障的な懸念が同時に存在していた。

これらの要素から、韓国の若者は「アメリカを中心とした安全保障体制の中で、中国・日本の双方と距離を取りながらも、文化的には開かれた関係を望んでいる」という立場が浮かび上がった。

一方、中国側の学生からは、「日本文化は好きだが、日本社会は閉鎖的」「メディアの偏向が他国への誤解を生む」との発言が見られた。彼らは国家体制の影響を自覚しつつ、個人レベルでは対話や文化交流を肯定していた。

このように、三国関係では「政治的な緊張」と「民間交流の親近感」が常に並行して存在しており、相互理解のためには教育・メディア・交流の三方向からのアプローチが不可欠である。

韓国から見た日本と中国

韓国から見た日本と中国の関係認識には、長い歴史的背景と複雑な感情が交錯している。韓国の学生たちとの対話からは、文化的な親近感と歴史的な警戒心が同時に存在していることが明らかになった。

まず、中国に対しては、「韓服やキムチなど韓国文化を“自国起源”として主張してくる」「北朝鮮との関係を通じて地域を不安定にしている」といった意見が多く見られた。これは、中国が東アジア地域において文化的・政治的影響力を拡大していることへの警戒心の表れである。特に、北朝鮮のミサイル発射をめぐって、中国が直接的に制裁を加えない姿勢に対し、「安全保障上の脅威を軽視している」と感じる学生もいた。つまり、韓国にとって中国は、経済的パートナーであると同時に、政治的には不透明で不安定な要素を含む存在として捉えられている。

一方、日本に対しては、「アニメやファッションなど文化面では好きだが、歴史的には複雑な感情がある」という声が多かった。韓国では義兵運動や青山里戦争（1920年）など、日本の植民地支配に抵抗した出来事が教育で強調されている。韓国人にとって青山里戦争は「日本に勝利した独立の象徴」として語られるが、日本の教育ではほとんど扱われていない。このような「歴史の記憶のずれ」が、両国の感情的距離を生んでいる。

また、「日本が敗戦後、アメリカが韓国に駐留し、今も米軍基地が存在している」という事実を通して、韓国の若者は戦後の国際構造を“日本からの解放”として理解している。一方で、日本側ではこの時期を「同盟国としての米国との協力の始まり」として捉えており、ここにも歴史解釈の違いがある。韓国にとって、アメリカの存在は「日本の支配からの脱却」と「安全保障の保証」を象徴するものであり、これが今日の外交姿勢にも影響している。

このように、韓国における日本認識は、単なる「過去の支配への反発」ではなく、独立後に形成された国家意識と密接に結びついている。独立運動の歴史教育や、戦後の米韓関係を通して、「日本＝過去の支配者、中国＝潜在的な脅威、アメリカ＝安全保障の後ろ盾」という三層構造が定着している。

しかし同時に、現代の韓国の若者たちは文化交流を通して日本に親近感を抱き、「歴史を学び合うことで関係を良くしたい」とも語っていた。これは、過去の記憶を否定するのではなく、それを理解した上で未来志向の関係を築こうとする姿勢であり、韓国社会の中で世代交代が進んでいることを示している。

日本から見た韓国・中国

日本から見た韓国と中国のイメージは、文化的な親近感と政治的な不信感が入り混じった、いわば「近くて遠い関係」である。本調査でインタビューに応じた日本人学生の多くは、個人レベルでは両国に対して関心や好意を示しながらも、ニュースやSNSを通じて抱く印象には偏りがあることを自覚していた。

まず、韓国に対しては「文化的に距離が近い」「K-POP やドラマ、ファッションを通じて自然に関心を持つ」といった肯定的な意見が多かった。一方で、「政治問題になると急に距離を感じる」「報道を見て反日感情が強いと思ってしまう」という声も多く、感情面では揺れが見られた。特に、韓国の大統領交代による外交方針の変化や、慰安婦・徴用工問題などがニュースで繰り返し取り上げられることで、学生の間でも「国としての印象」と「人としての印象」が分離している傾向がある。

日本の若者は韓国文化を通じて“個人としての親しみ”を持ちながらも、“国家としての関係”を複雑に感じており、政治と文化のねじれが関係の特徴として浮かび上がった。

一方、中国に対しては、経済力や技術力への敬意を示す一方で、「政治的体制への不安」や「メディア操作に対する不信感」が語られた。多くの学生が「中国は便利で発展しているが、情報が制限されている印象がある」「SNSで見る中国関連ニュースはネガティブなものが多い」と述べており、メディア報道が国民感情を形づくる重要な要因であることが明らかになった。また、中国国内での日本人拘束事件や尖閣諸島問題など、政治的対立が報道を通じて強調されることも、印象の固定化につながっている。

さらに興味深いのは、日本の学生たちが「中国・韓国に対して自分たちも十分に理解していない」と自己認識していた点である。「中国語や韓国語を学んだことがない」「学校で隣国の歴史をほとんど学ばなかった」といった発言からは、教育の中で近隣国理解の機会が限られている現状が浮かび上がる。実際、フォーカスグループで最も重視された項目は「教育交流」であり、若者同士の対話や学びを通じて、メディアを介さない“実際の相手国像”を知ることの重要性が強調された。

総じて、日本の若者の多くは「政治の問題は難しいが、人と人なら分かり合える」という実感を持っていた。政治的緊張の中でも、韓国や中国の文化を受け入れ、互いに学び合う姿勢は確実に広がっている。

このような“民間レベルの共感”こそ、冷え込んだ外交関係を溶かす鍵であり、今後の東アジア関係を考えるうえで日本社会が果たすべき役割の一端である。

中国から見た日本・韓国

中国から見た日本と韓国の印象は、経済的な関心や文化的な親近感と同時に、政治的な警戒心が強く存在するという二重構造を持っている。厦門大学でのインタビューでは、「日本や韓国の文化は好きだが、歴史を思うと複雑な気持ちになる」と語る学生が多かった。つまり、彼らの中には、理性的に他国を理解しようとする姿勢と、国家教育によって形成されたナショナリズムの間で揺れる複雑な意識がある。

中国では「不忘国耻（国の恥を忘れるな）」という言葉が今も教育やメディアで繰り返し使われている。これは、近代の侵略の記憶を忘れず、民族の自立を守るという意味を持つ一方で、国家的アイデンティティを強化するためのスローガンとしての側面も強い。この意識が日本への歴史的反感を維持させる役割を果たしており、「日本は侵略の歴史を十分に反省していない」と考える学生も少なくない。しかしその一方で、「現代の日本人を敵視しているわけではない」「実際に日本に行って印象が変わった」と語る声も多く、個人レベルでは交流意欲が高まっている。彼らは国家が描く“過去の日本”と、自分たちが接する“現在の日本人”を区別し始めているのである。

韓国に対する印象は全体的に日本よりも柔らかい。特に若者の間では、K-POPやドラマなどの文化的影響が大きく、「韓国はおしゃれで感情表現が豊か」といった好意的な評価が多く見られた。ただし一部の学生は、「韓国が中国文化を自分のものとして主張している」と不快感を示すこともあった。たとえば、キムチや漢服の起源をめぐる論争などが、中国の若者の民族意識を刺激している。

興味深いのは、中国の学生が国内の報道に対してある程度の“自覚的距離”を持っている点である。多くの学生が「中国のニュースは偏っている」「SNS上では感情的なナショナリズムが広がりやすい」と語った。その背景には、政府が国民の団結を維持するために、外部に“敵”を設定する傾向があるという見方もある。実際、「政府はときに敵を作り出すことで国内を一つにまとめている」と話す学生もあり、国家と国民の間にある政治的緊張を冷静に観察する姿勢が感じられた。

このように、中国における日本・韓国への見方は、一面的な敵対ではなく、複雑な歴史意識と現代的な現実認識が交錯している。国家の立場としては「歴史を忘れないこと」を強調しつつも、若い世代の中では「まず相手を直接理解したい」という声が強まりつつある。これは、過去を否定することではなく、「記憶の上に新しい関係を築こうとする姿勢」として評価できるだろう。

総じて、中国の若者は歴史の重みを背負いながらも、感情的な排他性から理性的な対話へと変化している。彼らにとって“敵”は外にあるのではなく、理解を拒む無知そのもののなのかもしれない。

B. 中国と台湾の関係

中国と台湾の関係においては、国家認識そのものが根本的に異なっている。両者はともに「中華民族」という文化的・歴史的基盤を共有しながらも、それぞれ異なる正統性を主張し、異なる「中国像」を描いてきた。その差は単なる政治的立場の違いではなく、教育、歴史叙述、世代経験の積み重ねによって深く定着している。

歴史的に、1949年の国共内戦の結果、蒋介石率いる国民党政府は台湾に撤退し、「中華民國」としての政府機能を維持した。蒋介石は台湾をあくまで「仮の拠点」とみなし、「大陸の人民を共産党の支配から救う」という理想を掲げ続けた。中正紀念堂には現在も「反共復国」「光復大陸」などの言葉が刻まれ、彼が「再統一」を信じていた姿勢がうかがえる。当時の台湾社会も、蒋介石の理念のもとで「大陸への帰還」を信じ、教育・報道・政策のあらゆる場面で“中華民國が唯一の正統中国”という認識が広められた。

しかし、1971年の国際連合総会第2758号決議によって、「中華人民共和国が中国を代表する唯一の合法政府」と認められ、国連および関連機関の代表権は中華民國から中華人民共和国に移った。この決議は台湾にとって決定的な転機となり、以降、台湾は「国家でありながら国家として認められない」存在となった。台湾社会では「戦後の日本からの返還は中華民國へのものであり、中華人民共和国に帰属したことはない」という意識が根強く、国際法上の位置づけと人々の自認の間に大きな乖離が生まれている。

中国本土においては、この歴史を「台湾は中国の一部であり、分断は一時的な状態にすぎない」という文脈で語る。都市部の街頭では、「两岸一家亲（兩岸は一つの家族）」「纪念中国人民抗日战争暨世界反法西斯战争胜利80周年」などのスローガンが随所に掲げられており、国家的レベルで“統一”の正当性が強調されている。さらに、10月25日を「台湾光復紀念日」として位置づけ、「日本の侵略は台湾から始まり、台湾で終わった」とする語りを通して、台湾の帰属を“抗日戦争の勝利の延長線上”に組み込んでいる。こうした歴史叙述は、台湾問題を単なる地域問題ではなく「民族の再生」と結びつける役割を果たしている。

一方、台湾側にも「台湾光復節」という同名の記念日が存在するが、その意味はまったく異なる。1946年に行政長官公署がこの日を「日本統治からの解放を祝う日」として制定し、当初は国民的祝日として盛大に祝われた。しかし2000年代以降、政治の多様化とともにその扱いは変化し、2000年に祝日から除外、2025年に「台湾光復・金門大捷紀念日」として復活するなど、歴史記憶の再構築が続いている。台湾では、「光復」はあくまで“中華民國としての再出発”を意味し、「中華人民共和国への復帰」という認識は存在しない。

現地でのインタビューでも、「台湾は台湾」「戦争は望まない」「現状を保ちたい」という声が多く聞かれ、平和的共存を最優先する姿勢が目立った。台湾のニュース番組では中国政府に対する批判的報道が多く、情報空間そのものが政治意識の形成に強い影響を与えている印象を受けた。政治的立場の異なるメディアが複数存在することは民主主義の成熟を示す一方で、過剰な「恐中」や「反中」感情を増幅させるリスクも感じた。

現地滞在中、私が印象深く覚えているのは、あるネット投稿の話である。そこには「台湾の古い住宅が地震に弱いのは、戦後に大陸から逃れた人々が“いずれ本土に帰る”という希望を抱き、仮住まいとして建てたためだ」と書かれていた。真偽は定かでないが、この逸話には象徴的な意味がある。——それは、「世代ごとに未来の見方がまったく異なる」ということだ。蒋介石世代は“帰還”を信じ、彼らの子孫は“分離と平和”を選ぶ。その価値観の変化こそが、兩岸関係の複雑さを最も端的に示しているように思う。

一方の中国大陆では、「台湾は中国の一部である」という立場が教育や報道を通して徹底されており、学生たちは「統一は歴史的必然」と語る。台湾への公然たる敵意は少なく、むしろ「台湾同胞」として文化的親近感を強調する傾向が見られる。国家主導で行われる「兩岸青年交流」「共通文化イベント」などの活動は、平和的統一の雰囲気演出する一方で、実際には政治的影響力の拡大を目的としている。私が出会った台湾籍の学生も、中国政府主催の交流イベントに無償で招待されており、政治と文化が密接に交錯している現実を実感した。

このように、中国と台湾の関係は「独立か統一か」という単純な二項対立では捉えきれない。そこには「歴史的正当性」「国際承認」「教育」「世論」「世代感情」といった多層的要素が絡み合い、それぞれが異なる“真実”を支えている。中国が「主権と統一」を重視するのに対し、台湾は「自由と平和的共存」を重んじる。その根底には、戦争への恐れと、異なる未来への希望が交錯している。

私はこの複雑な現実を前に、どちらか一方の正義を選ぶことよりも、互いを「異なる歴史をもつ隣人」として理解し合う努力こそが必要だと感じた。歴史は国によって語られ方が異なるが、その違いを知り、認めること自体が平和への第一歩である。台湾の若者が語る「戦わない平和」と、中国の学生が信じる「統一による安定」は、対立ではなく、異なる平和のかたちとして共存し得るのではないか。兩岸の未来は、対話と理解の積み重ねによってしか開かれないと、私は強く感じている。

5. 自己評価と今後の展望

本研究の過程で、私は「違いを知ること」は「分断を生むこと」ではなく、「共感を広げること」であると確信した。日中韓、そして台湾を含む東アジアの未来が、過去に囚われるのではなく、互いの理解と尊重の上に築かれていくことを願いながら、今後も国際関係の分野で研究と実践を続けていきたい。今回の調査活動では、従来のアンケート調査に加えて、インタビューや観察、文献調査など、さまざまな手法を組み合わせることで、多角的な視点から対象を捉える試みを行った。アンケートは短時間で多数の意見を集められる利点がある一方で、質問設計や回答解釈によって結果が大きく左右される。その限界を補うために、実際に人々と対話し、現場の空気や感情を感じ取りながら分析を進めることで、数値だけでは見えない背景や思想の深層に触れることができた。この経験を通じて、調査方法の選択と組み合わせが、結果の信頼性や解釈の深さに大きく影響することを実感した。

一方で、今回の調査は母数の少なさや時間的制約という課題もあった。対象者が限られていたため、得られたデータを一般化することは難しく、回答者一人ひとりの意見の重みが結果に大きく反映される傾向があった。今後は、調査対象の拡大や複数回のデータ収集を行い、より統計的信頼性を高める必要があると感じている。

それでも、今回の活動で最も印象的だったのは、数字ではなく「人の声」そのものに触れられたことである。実際に話を聞く中で、回答の背後にある生活の実感や心情が浮かび上がり、自分自身の理解も揺さぶられた。たとえば、台湾の学生が「戦争は怖いけれど、平和の形は一つではない」と語った言葉や、韓国の学生が「日本を嫌っているわけではない、でも歴史を通して距離を感じてしまう」と打ち明けた瞬間に、私は「歴史認識の違い」が単なる知識の差ではなく、感情や経験の積み重ねから生まれていることを実感した。

日本、中国、韓国、台湾のいずれの地域でも、国家の歩んだ歴史が人々の価値観に深く影響しており、政治体制・教育・メディアがその認識を形成している。しかし、どの国の人々も根底では「平和を望み、より良い未来を築きたい」という思いを共有していた。表面的な立場の違いの奥に共通する願いがあることを知ったとき、私はこの研究の本当の意味を理解したように思う。

当初は、日中韓関係を「政治的対立」として分析しようとしていたが、現地での対話を重ねるうちに、それはむしろ「人と人との相互理解の問題」であると感じるようになった。政治的枠組みや歴史的立場を超え、互いの文化・教育・日常の中にある“他者の見方”を知ることこそが、対話の出発点になる。歴史を学ぶとは、過去の事実を知るだけでなく、「他者がどう世界を見ているか」を理解する営みだと気づいた。

また、対話を通して感じたのは、同じ「歴史の重み」に対する向き合い方の差である。中国や韓国では、過去の出来事が国家アイデンティティの中核として語り継がれており、「歴史を忘れないこと」が国民の誇りや正義と結びついている。一方、日本では、戦後の経済復興と平和主義の中で「過去よりも未来を重視する」傾向が強く、他の二国と比べて歴史を“今”の政治や教育に直接結びつける場面は少ないように感じた。

この差は、どちらが良い悪いという問題ではなく、歴史をどう記憶し、どう教えるかという文化の違いを反映している。日本では「過去を乗り越える」ことが強調され、中国や韓国では「過去を忘れない」ことが強調される。その間にある価値観のずれが、東アジアの相互理解を難しくしている一因でもあると感じた。

そして、この研究は私自身のアイデンティティにも深い影響を与えた。日本で教育を受け、中国にもルーツを持つ自分が、どちらか一方に偏らず両方の社会を観察者として見つめられたことは、貴重な経験だった。異なる視点を行き来する中で、単一の「正義」では説明できない現実の多層性を感じ取ることができたと思う。

本研究を通して私は、「違いを知ること」は「分断を生むこと」ではなく、「共感を広げること」につながると確信した。日中韓、そして台湾を含む東アジアの未来が、過去に縛られるのではなく、互いの理解と尊重の上に築かれていくことを願いながら、今後も国際関係と文化理解の分野で研究と実践を続けていきたい。